

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、
どのように保障しているか

①分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、「仲間づくり、集団づくりの取組を通して、子どもや集団がどう変わり、どんな展望が持てたのか、また、教職員の立ち位置や変容について明らかにしよう」と提起した後に、報告・討論に入った。

II. 報告および質疑討論の概要

—報告1—⑤

私、自分の立場を知っています。（島根県人教）

報告者が、子ども会活動を通して「差別に負けない力」をつけるとともに、「仲間どうしをつなぐ」ことを意識し、一緒に課題に立ち向かえる仲間づくりを大切にしてこられたことが伝わってきた。報告者は技術論ではなく、とにかくとことん子どもに寄り添い続けている。だからこそ、Aさんとかかわりの中で自分自身の変わり目に出会い、自分の立ち位置を問い、自分自身に向き合いながら頑張ることができた。報告者がこれからも前を向いて進もうとしていると感じることができる報告だった。

—主な質疑と応答—

京都 報告者の考える立場の意味とは。

報告者 自分自身がこれまで自分の決めた枠にとらわれて生きていた。Aさんとの出会いの中でその枠を越えて、仲間と語りつなげる生き方ができるようになった。人と人をつなぐ生き方や、自分自身が学ぶことで差別をしない生き方をしたい。

高知 益田子ども会とはどのような会なのか。推進者とはどのような仕事をしているのか。

報告者 被差別部落の子どもたちの学習会。差別に負けない仲間づくり、将来の進路を切り拓く力をつける、基本的な生活習慣や基礎学力の定着をねらいとして週1回人権センターで開かれている。子ども会を中心となって運営している推進者は、被差別部落の子どもたちの進路保障のために活動している。毎週水曜日に連絡会を持ち、会の方針や子どもが所属する学校との連携について話し合っている。

熊本 子ども会には保護者が集まるような会があるのか。

報告者 親の会を立ち上げ人権学習を進めてい

た時期もあるが、今はできていない。しかし、子ども会の時間に親同士がつながれたり推進者と話ができたりするような時間をつくっている。

福岡 Aさんに立場を伝えるときにどのようなことを伝えるつもりだったのか。誰が伝えるのか。

報告者 保護者の方も私も最初は伝える自信がなく、お互いに学びながらのスタートだった。保護者の方と緊密に連携し、何度も話をしながら進めていった。差別をしない生き方をしている両親の素晴らしさや誇りを持って生きてほしいこと、Aさん自身も差別をしない人になってほしいという願いを話すつもりだった。

鹿児島 Aさんの受けた被差別体験についてももう少し詳しく話してほしい。

報告者 Aさんの立場を知っている先生の中にはやたらとほめる先生がいるなど、微妙な距離感を感じる時があったようだ。Aさんや保護者の方と何度も話を聴きながら気持ちを聞き、受けとめるようにしていた。Aさんの通っている中学校とも連携しながらAさんが気持ちよく学校生活を送れるように努めた。

—報告2—⑧

諦めなければ、願いは必ず叶う（熊本県人教）

報告者自身が、部落の子とどんな出会いをして、部落の子が直面する現実は何を感じて、自分の生き方がどのように変わってこられたのかを感じることができた報告だった。報告の中で語られた内容から、学習会などでの活動を通して自主活動の確かさが伝わった。とりわけ、リョウの具体的な変容を通して、自主活動が子どもたちのつながりをより深めていくことも明らかになった。

—主な質疑と意見—

熊本 リョウが中学校まではいやいや学習会に行っていたり、人権にかかわりたくないと言っていたりしたのはなぜなのか。

報告者 兄が学習会に行っていたため、小さい頃から自然に学習会に行っていた。しかし、見たいテレビと学習会の時間が重なり友達と会話があわないことがあったため、次第に行きたくないと感じるようになった。また、話しても自分のことがわかってもらえないからかかわりたくないという思いを持っていた。しかし、学習会の意味が分かり、母親が父親ががんばってきた活動だから積極的に行かせようとしたこともあり、高校生になってからは進んでいくようになった。父親が母親との結婚を母親の家族に説得できたのも学習会で学んできていたからだと思った。

熊本 報告者にとっての学習会とは。

報告者 今はリョウといろんな話がしたい。子どもたちがつながれる場。子どもたちとじっくり向き合える場だと思っている。

京都 ムラの子どうしのつながりは深いが、ムラの子とムラ以外の子との仲間づくりはどう実践

しているのか。

報告者 まだうまくできていない。壁があるように感じており、課題だと思っている。

徳島 学習会はすごく大切なもの。立場の自覚を進め、反差別の教育を進めるといふ姿勢はすごく大切だと思う。立場の自覚とは、夢を語り、誇りを持つこと。差別を乗り越えていく関係をどうつくっていくのか、そういう教育を大切にしてほしい。

報告者 全国に仲間がいることを感じられてうれしい。

鳥取 ムラに生きる者として、先生方の取組やがんばりに感謝している。取組をすすめてほしい。

徳島 仲間づくりは子どもたちの居場所づくり。教員も一緒になってがんばれる、そういう学習会になってほしい。

一報告3-②

「じんけん」学習のむこうがわに考えたこと～なんで、なんで、とみんなで考えた2年間～

(大阪市人教)

報告者は、しんどさを抱えながら生きている子どもたちのかかわりをNさんの変容を中心に語られた。クラスの中にいろいろなルーツのある子どもたちの存在があるからこそ、また自分がこだわっているハンセン病をはじめ様々な人権課題について学ぶ取組をすすめてきた。取組の中で自分の姿勢や覚悟が問われ、自分自身が必死に取り組んでいかなければいけないことに気づかされる。真剣に本気になっている教師の姿からは子どもとの真剣な対話が生まれ、真剣に人権に向き合う姿が報告された。

一主な質疑と応答一

大阪 学校の仲間との協力はどうなっているのか。

報告者 仲間をつくって取り組んでいくことが大切。だからみんなを巻き込みながらいろいろなことを投げかけていった。最初は一人での取組だったが、みんなに「一緒にやらん？」って声をかけながら広がっていった。

大阪 Nはその後どうなっているのか。

報告者 今は朝も遅れずに来ている。生活の荒れもあったが、仲間たちの支えの中で頑張っている。

大分 保護者や子どもとのつながりをつくるために語ることは大切。どんな仕掛けで語ってもらっているのか。

報告者 学級だよりや連絡帳のコメントなどを通して保護者ともつながっている。保護者からの反応があれば必ず返す。子どもたちには自分のことや社会問題について常に語るようにしている。また、当事者の話を聴いておしまいという学習ではいけない。自分たちの見方や考え方の中に差別があることに気づかせる子どもも大切。子どもたちは1つの学習を他の学習につなげて考えること

ができる。そこがすごいと思う。

高知 先生はその熱い姿勢はどこから生まれているのか。

報告者 自分の子どもの頃、周りには様々な課題を抱える仲間もたくさんいた。辛い思いをしている仲間を見てきて、どうしたら解決できるかな～という思いを積み重ねながら教師になった。育った環境や昔から考えてきたことが今につながっている。

一報告4-④

つながりはぬくもり～人権劇『挑戦者たち』制作・上映と学級集団の育ちを振り返って～

(高知県人教)

報告者は、学級集団づくりをベースに、人権集会で人権劇に取り組んだ。ムラの子供たちは小学校から毎週地域の歴史や人権についての学習を続けてきており、人権集会で解放子ども会の発表を行うなど、黒潮町では、子ども会の子どもたちが学校内や地域でいきいきと活動し、町民全体で部落差別を解決する取組の報告であった。地域に聞き取り、思いをつなげて作り上げた人権劇の取組が、3年生になって、運動会や人権集会にさらに自主的積極的な取組につながり、高校進学のみならず自分の将来について考える進路の対話につながっている。

一主な質疑と意見一

熊本 ムラの子がクラスの中にどのくらいいて、立場の自覚はどうなっているか。

報告者 クラスの中に4名。地域のNPOが子ども会を運営し、子ども会の中で小学校の時から人権学習を続けている。小学校でも子ども会があることを紹介し、子ども会があることが当たり前の状況をつくっている。子ども会活動を地区出身生徒が発表する場もある。

熊本 人権劇を通して子どもたちがどう変わったか。

報告者 生徒同士のつながりの深まりを感じた。また、みんなで成し遂げた達成感を味わうことができた。地区出身生徒も積極的に関わり、自分の思いを語ることができた。

熊本 子ども会に学校はどのように関わっているのか。

報告者 子ども会には教職員も輪番で1人以上参加しているし、指導員の方には教職員の人権研修でも話をしてもらっている。地域をあげて取り組んでいる。

高知 子ども会の子どもたちは、学校とのつながりの中で前を向いて生活できるようにしたいと思っている。児童館は地域と学校をつなぐ役割をしたいと思っている。

高知 立場の自覚について、地区を出て地区で育っていない親がどう子どもに伝えるか悩んでいる。でも伝えたい思いがある。それを支える仲間

が必要。ここにいるみんながそんな仲間であってほしい。

Ⅲ. 総括討論およびまとめ

討論とまとめで次の2点を確認め合った。

1点目は、仲間づくりの必要性である。子ども同士の対話ができる人間関係づくりや対話ができる機会を保障することが仲間づくりの大きな要素になるのではないかとフロアから語られた。子ども会や学習会の中で、ムラの子同士のつながりや絆を深めること、学校や地域でムラの子以外の子との仲間づくりをすすめ、支える人間関係の構築の必要性が語られた。仲間づくりは子ども同士だけではなく、教師、保護者、地域の方々、すべての人々がつながることが大切である。

2点目は立場の自覚についてである。その人の生き方(当事者)との出会いが、マジョリティ、マイノリティそれぞれの立場を自覚することにつながり、仲間のなかで立場を語れることにつながっていくことも確認された。一人ひとりの人間は同じ所もあれば違うところもある。それぞれがそれぞれの立場を自覚しながら対話を深めることが大切なのではないかとフロアから語られた。

Ⅳ. おわりに

報告には、実践者が出会った子どもたちの生の姿があり、その出会いで「魂と魂がぶつかりあい」、心が揺れ、情熱が生まれた。各地域での取組や推進体制などには違いがあったが、どの取組にも出発点やきっかけがあった。今大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、明日からの実践につなげていきたい。

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、
どのように保障しているか

②分散会

I はじめに

報告の前に分科会の基調提案を行った。

同和教育において、教室にいない子の家庭訪問をするなかでいろいろな事実を知っていくということが受け継がれてきた。今も、しんどい子はどこにいるのかということを考えて、自分の思いを重ねながら活動している。そこが自主活動の本質ではないだろうか。

私たちは、さまざまな子どもたちの主体的な活動、居場所づくり仲間づくりを行ってきた。その際の私たちの立ち位置は常に問われていること

を意識せねばならない。それぞれの差別の問題について、私たちは子どもたちや当事者から問われ、それを受け止めた自分がどのように返していくのかを考えていきたい。

このような提起を行い、報告に入った。

Ⅱ 報告および質疑討論の概要

—報告1—①

人権委員会から広げる仲間づくり (徳島県人教)

人権委員会として校内ですばらしい取組が行われている一方、人権部に参加しない部落の子どもにどれだけ寄り添い、親の思いを聞き、部落へ出向けているかが問われた。

—主な質疑と意見—

香川 隣保館で勤務していた時、高校生がボランティアとして参加してくれたことにより文化祭が活気づいて、地域の方との交流も深められた。隣保館の現状や生徒が隣保館の方へどのようへ関わっているかなどについて教えてほしい。

報告者 地域の人権学習子ども会が昨年度まであった。今年度、地元の小学校が統合された関係で校区が大きく変わり、子ども会の活動ができないう状態になっている。そのため、今年度はできていないのだが、昨年度までの状況で言うと、七つの高校で始まった高校生友の会「七の会」と人権学習子ども会と交流をもっていた。夏の一泊研修の手伝いやクリスマス会の手伝いや出し物などをしていた。

徳島 報告者の前任をしていた。子ども会でずっと育ってきた子が大きくなって中高生の人権交流集会で中心的活动をした。そういった生徒が育ってきた土壌としては報告にもあるように地域とのいろいろな交流のなかで受け継いできたものがあると思う。だから学校だけで子どもに関わっていくだけではなく地域とのつながりが大事だと思う。補足として。

大阪 地域とつながって豊かな取組をしているのに人権部の子どもが減少している原因を学校の教員はどのようにとらえているのか。人権学習子ども会に何かあったのか、学校の働きかけに何か変化があったのか。

報告者 一昨年までは活発に活動していたが、その段階ではあまり活動に関わっていなかったのかということについては不明なところがある。希望者がいないので部員確保できないが、ただ募っただけではなかなか集まらないので、人権委員会の活動の拡大を考えている。しかし、人権部も部活動のうちの一つとして考えられており、部員確保のために学校としてなんとかしようという動きにはなっていない。どうしていけばよいか模索している。

協力者 人権部は子ども会や部落の子だけが入れられるようなものなのか、そういうものではないの

か、もう少しくわしく聞かせてほしい。

報告者 全員が部落の子どもということはない。特別な条件というものはなく誰でも入ることができる。

三重 人権部のめざしているものは何なのか。地域で活動しているものの立場から言うと、めざす青年像のようなものを地域の子に見せてあげてほしい。あと、地域で活動しているのに人権部で活動しない子がいるというのなら先生もどんどん地域に入って行ってほしい。

香川 統合が起こった時に学校としてどのようなことを大切にして今の学校の姿になったのか。実際にこれからどのような人権・同和教育をめざしていくのか。

福岡 部落差別についての学習はどんな内容で、どれぐらいしているのか。ムラの子の立場の自覚、まわりの子の社会的立場、反差別の当事者性はどの程度あるのか。

報告者 合併にあたっての状況については自分が関わっていなかったので十分わかっていない。ムラの子がどれくらいいるのかということも把握しきれしていない。学習会で育ててきた生徒については卒業して直面する問題についてもう少し話をしなくてはいけないし、何ができるか考えながらやっていかなくてはならない。

大分 大島青松園の訪問で子どもたちは自分の生活とどのように照らし合わせていったのか。もしそのような声あまり見られなかったのであれば、その課題はどこにあるのか。

報告者 いろいろな活動をするごとに生徒からの感想や思いを把握するようにしている。生徒の意見には、差別の現実、歴史を許さずに伝えていかなければならないという声が多く、子どもは経験を通して変わっていきけるのだと思った。

島根 裁量の広い自由度の高い部だと思う。少ない人数でもやってよかったと思って卒業してくれたら、と思う。人権委員会と違って人権部については一人ひとりが達成感や成就感を感じ、自己実現というところに向かっていけばいいのかなと思う。

徳島 人権学習子ども会に関わっている。中学校を出たら広い範囲に散らばってしまうので高校に行くと、どうしても活動が途切れがちになるところを、働きかけを継続していく中で、年代を越えて子どもたちがつながれるようになってきた。小学校の子たちが、高校生の姿を見ながら、こんな風に成長していきたいとイメージして大きくなる。そして、成長したらやがて下の世代にまた伝えている。

課題としては保護者の意識が「やらなあかん」から「やる」に変わらないと自分たちもサポートしにくいので意識が変わっていかなくてはならない。

一報告2一⑦

「私は学習会に行く。自分は弱い人間だから勉強せんといかん。」～さくらの成長とともに～

(大分県人教)

一人でも大切な子ども会の活動はつなげていきたいと活動に取り組む子どもの姿が伝えられた。子ども会の活動を通して、地区内外で反差別のなかまをどう育てていくかが問われている。立場をいつ、だれが、どのように伝えるのかという立場の自覚について意見が交わされた。

一主な質疑と意見一

香川 小学校、中学校の学習会の違いは。母親がさくらに立場を告げた時の学校との連携は。「自分は弱い人間だから…」の「弱さ」とは、学力のことか、差別に立ち向かう力のことか具体的には何か。

報告者 小学校の学習会には地区外の子どもも来ている。学校から、全保護者にむけて人権学習の取組について知らせる際、学習会についても知らせる。誰でも一緒に活動できるという風になっている。中学校の学習会の様子は後程中学校の先生から。

自分は学習会の担当だが、「いつかは自分の立場と向き合うことがあるだろうな」ということを考えながら担当になった。自分の立場を聞いた時にしっかり自分のことを大事にしながら判断できる力をつけてほしいということも思っていたので、教材についてもそういうものを選んでいたり、保護者会でも子どもを中心に置きながら、取組の様子や思いを共通理解していった。

自分の弱さは人それぞれ違うと思う。予想するところでは、しないといけないことをせずに好きなことばかりしてしまいそうな弱さや、仲間づくりの時にもっとこうすればよかったという思いや、そういったいろいろなことがあるのかなと思う。中学校の方からも様子を話してもらえれば。

中学校 24年前の差別事件を機会に学習会がはじまった。それまでは中学校区に3つのムラがあったので3か所それぞれ学習会を設けていたが、目の前の差別と闘っていくことをめざして連帯して行うことになった。移動で10年ぶりに中学校にもどってきた。子どもの数は減っていたが、ともに差別と闘う仲間として地区外の子どもが何人かいた。去年は3年生が卒業したので、人数が一気に減ってしまったが、さくらさん一人で学習会に参加していくことになった。今は少しずつつながりが広がってきている。

さくらの母 子どもは、一人でも人権学習会の旗をつくり、次の人に思いをつなげていくということ大切にしている。子どもががんばっているから、4月から自分も指導員として参加している。今までは外側の立場として見ていたが一緒に活動するようになって、子どもたちのがんばりがわかり、

自分たちも一緒に立ちあがってがんばっていかなければいけないと改めて思うようになった。

鳥取 地区外の子と一緒に参加する意味はどこにあるのか？

報告者 地区のなかにも学習会に行っていない子はいる。地区外から来ている子は、地区と道一本隔てて、地区か地区じゃないかという環境。小さいころからともに育ってきて、これからともに過ごしていく。だからともに学んでいくのも当たり前で、親もそこに線を引きたくないという思いだと思う。

大分 参加する親には「活動する中で、ムラの子と思われる可能性もある」ということを含めて事前にきっちり話をする。それでも一緒に活動する、人権を大事にするという心に地区の内も外もない。

一報告3-③

宿泊研修だからこそ深まる絆『またあおうで！』の約束 (鳥取県人教)

学校と地域が連携して子どものしんどさやそのくらしに丁寧に関わっている様子が伝えられた。地域の関わりのなかで、差別に出会ったときに切り返す力が育っている。子ども会の解放学習をとおして、子ども会への参加に消極的な親をどう変えていくことができるか。

一主な質疑と意見一

香川 本校でも学習会に取り組んでいるが、学校との連携はどのように行っているか。学校と家庭との懸け橋となっているという話だったが、具体的な話があれば。また、公募についての様子を知らせてほしい。

報告者 学校と意識してつながろうとしている。センターに先生を招くことも多い。たくさんの事例があり、さまざまな思いでセンターに来る子どもたちがいる。しんどい子どもの状況や家庭の様子などを先生とつながりながら何かあれば解決にむけて協力している。公募については行政のことなのでよくわからないが、学習会はもういいんじゃないか、という声が議会の方であがってきたというように聞いている。しかし、そうじゃなくて、学習会で子どもたちに解放の力をつけていかなくてはいけないのだという声が地域や運動体からあがってきた。学習そのものより解放学習に力を入れている。

大阪 公募にしたことによって学習会に参加できなくなった家庭があったという話が気になった。部落問題学習に関わるのではないかと思うのだが、部落・部落外の子どもと一緒に学んでいる宿泊研修の場で部落問題がどのように取り上げられているのか。またともに学んで成長した子どもたちが一緒に学んだことの意味に気がついてきたときに何かフィードバックがあるのか。

報告者 公募することで被差別部落に住んでい

ようがいまいが、全体から広く募ることになる。そのことによって「誰が参加してもいいのなら、被差別部落の出身である自分たちが参加しなくてもいいのかな」という意識に転換されてしまったように感じる。「もういいのでは…」と思う保護者の気持ちが子どもにも伝わっている。

子どもたちが大きくなって、差別発言を受けた時に悲しい思いをしたが、子ども会で出会った仲間が真っ先に声をかけてくれたのがとても励みになったという話も聞いている。大きくなってこのムラに生まれたことを誇りにもとうとずっと伝えている。

鳥根 宿泊研修の取組の歴史を教えてください。スタッフの変容はどんなものか。

報告者 35年続いている。集いを通してだけでなく、日ごろから子どもたちとつながろうとしている。いろんな声かけをしていく中で、成長と言えるかはわからないが「すてきな地域のおばちゃん」にさせてもらっている。活動を通して子どもにいろいろな声かけができるようになってきた。

大分 進路公開において自らを語るにあたりどのような取組をされているのか。

報告者 一泊しただけでは、進路公開できるものではない。日ごろからうれしいことも悲しいことも、ともにつながりあってできるものだと思う。「学校での生活や児童館での姿で悲しい思いをしている子をほっとかないあなたたちになろうね。みんなで話し合えば分かり合えるから」と子どもたちには伝えている。

協力者 進路公開とは何か？

大分 自分の将来をイメージする時に、そこには自分の生活背景があって親の姿があって、「このように生きていきたい」と語るためには、自分の生活をどこかで語り続けていかなければならない。仲間はそのことを受け入れてくれている。そんな姿を想定している。

鳥取 肢体不自由児の療育キャンプの活動において、保護者はもちろんボランティアどうしのつながりもできる。その相互にとってもうまくいっていると思うので提案という形で話させていた。

徳島 宿泊学習で学んだ子どもたちが地域に帰ってきたときにどのように関わっているか。

児童館館長 交流会や学習会で先輩が自分の生い立ちを語ることで子どもたちがあこがれをもつようになる。それが自分もがんばろうというところにつながっていく。30数年前の自分と今就職した子に同じ事象が起きていた。ただ、自分の学びがとぼしかった時代と学習会で学びを積み重ねて学校でも人権学習をやってきた子どもたちでは勇気が違う。私は被差別部落の人間ではないと思われて、「同和の子とは付き合うなよ」と先輩に言われた時に勇気が出ず、被差別部落の出

身の自分が「部落差別はしません」としか言えなかった。今の子は違う、大阪に就職した子が、「あそこは安いけど同和地区やから住んだらあかん」と言われた時、「おばちゃん、何言ってんの。私は同和地区の出身よ。おばちゃん、恥ずかしいよ」。こういったことを間髪入れず返せる子どもが育ってきたのは、これまでの取組や熱い思いをもって関わってきた人たちの成果。

大分 自分も活動をする中で、教職員の参加に関しての温度差が課題の一つだと感じるがどう思うか。

報告者 学校間によって違いがあるというのは感じている。片方の学校ですごく協力的だったのに隣の学校は全然ちがうなと思ったことがある。教職員もそうだが管理職の考え方でかなり違ってくる。学校の職員が自覚をもって取り組んでもらうことが大事だと思っている。

一報告4-⑥

差別をなくしたい～つながりを力にして～

(大阪府人連)

しんどい子どもにこだわって学校全体として関わっている姿が報告された。クラスミーティングなど自己開示する場が設定されており、語り合うことでつながりを力にかえて、反差別の集団づくりが行われている。

一主な質疑と意見一

鳥取 つながる、伝えるということがキーワードになっていたが、クラスミーティングが具体的にどう運営されているか、子どもたちがしんどさを語れるような関係づくりのために取り組まれてきたことがあれば。

香川 まわりの子どもたちの変容もあれば。また校区の二校の地区の違いなどを教えてほしい。

報告者 班での関わりや行事をとおして気になる子どもが変容していけるように意図をもつこと、教職員みんなで子どもの様子を共有することを大事にしている。そこがクラスミーティングの「つなぐ」ということに大きく関わってくる。どんなことを話すかは事前に考えるように子どもに伝える。しんどいことを仲間に伝えるかどうか、どのように伝えるかというところは、事前に話し合う中で決めていく。

まわりの子どもも変容を遂げた。つながりを深めるため班学習、行事を一つのきっかけとすること、人権学習を大事にすること、これらを通してお互いのことをわかりあうことを大事にしてきた。

小学校二校のうち一校は有地区でもう一校は中国籍の子どもが多い。

大分 Aの変容のきっかけとして祖父との出会いなおしがあったと思うが、そこには何か事前に関わりがあったのか。

報告者 Aの自発的なものだった。Aの語りに対

して、当時の人権教育担当と家庭訪問をして家族がいるなかでもう一度話を聞いた。小学校の時から積み重ねられてきた取組が中学校の取組につながっていったように思う。

福岡 取組のなかで形だけが受け継がれ、思いが伝わっていかないというところがあるのだが、そうならずきちんと学校として引き継がれているのはどういったところに理由があるのか、何を大事にしているのか。

報告者 赴任当時、荒れた子どもたちと出会うなかで、子どものしんどさの奥に思いがあって、そ子とつながることを大事にしないといけないと思った。学校としては、年度始めや夏休みなどに教職員で気になる子どものしんどさや人権課題について考え、どんな取組をしていくかを話し合っている。

代々そのようにして学校全体を見てくれていた先生を中心にして、しんどい状況にある子どもや学年、学校についてみんなで一致団結して考えていくなかでその大切さを感じた。

報告校 本校がつくられた成り立ちが大きく関わっている。ムラの産業の手伝いで学校に行けなかった子たち。産業の衰退とともに学校には通えるようになったが、差別や学力的な課題がある中で、荒れという形でしか示すことができなかつた子たち。そんな中で解放運動が行われ、本校が建設された。創立記念集会を必ず行い、そこで学校が建った意味をきちんと理解し、子どもと教職員で取組をつくりあげていく。

まず、子どもたちが一人ひとりのもっている人権をどれだけ大切にできているか。そのことを託されて建設された学校であるということも折に触れて教職員で確認する。大切な原点をもちながら、それをどのように具現化していくかということも毎年話し合っていることが途切れずに取組をうみだしていくことにつながっている。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

子どもが自分の立場をどのように知るか、だれがどのように伝えるかという点においての議論がなされた。差別の現実だけでなく、部落の豊かさを伝えるならば、どのような形になれども、それはよいことではなかろうかということが話された。しかしながら被差別の当事者でない人が伝える時、自分の部落認識をしっかりとたなければならぬことも確認された。そのためには自らムラに入り、子どもや親と正面から向き合い、思いを重ねていくことが大切である。

さまざまな活動を後の世代にどのようにつなげていくかということも議論がなされた。ムラの子が少なくなつて、活動や運動の存続のしかたについての話の中で、地区外の子どもが活動に加わることの意義が問われた。差別は誰の問題か、差別する側の問題だとして捉えていくことも必要で

あるが、ともに反差別の立場として活動することの意義についても議論された。

そのようにしながら、児童館や集会所の明かりを消すことなく、存続していった先には、再びムラの子がそこで学び成長していく姿を見る日が来るであろう。また、そのためにも地区外の間人がムラに行くということは意味のあることだという話が出た。

子どもの自主活動について議論がなされていたが、おとなの側の自主活動はどうであったかについても触れられた。クラスミーティングや学習会の関わりの中で、自分のことを差し出すことができているのかということ問い直していくことが大切である。今回、本分散会ではそれぞれ自分のことを差し出して発言される方が多く、そのことが分散会の深まりをもたらしたように感じている。

それぞれがここで深まった学びや思いを現場にもち帰って子どもに返していくことを確認することができた分散会であった。